



各務原台地 シンポジウム

資料集

表紙写真：地誌 大山市教育委員会

各務原台地 シンポジウム

10:00	開会挨拶	
10:05	基調講演「各務原台地の生い立ちとわれわれの生活」	岐阜大学名誉教授 小井土 由光
11:30	昼休憩	
12:40	プレゼンテーション 1-3	
	近世史	岐阜女子大学地域文化研究所長 丸山 幸太郎
	近代史	垂井町立東小学校長 鷺見 隆司
	考古学	NPO 法人 古代瀬波の里文化遺産ネットワーク 副理事長 服部 哲也
13:40	休憩	
14:00	プレゼンテーション 4	
	植生	岐阜県立森林文化アカデミー准教授 柳沢 直
14:20	パネルディスカッション「歴史の舞台、各務原台地」	
	コーディネーター	小井土 由光
	パネラー	丸山 幸太郎 鷺見 隆司 服部 哲也 柳沢 直
15:30	閉会	

目 次

プロローグ	6
概説	
各務原台地とは	12
熱田海進による三角州の形成	13
各務原層と火山灰	14
浸食による各務原台地の形成	15
低位段丘の形成	16
土地利用から知る水源	17
地名に反映された地形	18
分布図から見た各務原台地の地形	19
基調講演	
各務原台地の生い立ちと生活環境	岐阜大学名誉教授 小井土 由光 24
プレゼンテーション	
各務原台地と中山道	岐阜女子大学地域文化研究所長 丸山 幸太郎 30
近代における各務原台地の開発	垂井町立東小学校長 鷺見 隆司 32
遺跡に学ぶ防災	NPO 法人 古代瀬波の里文化遺産ネットワーク 副理事長 服部 哲也 34
各務原台地とその周辺の里山	岐阜県立森林文化アカデミー准教授 柳沢 直 36
各務原台地を知るための基礎知識	40
訪ねてみよう台地と人々の歩み	
台地の高さを体感する	46
台地から見おろす	48
水が生み出した台地	50
台地に住む 台地を行き交う	52
台地のはじまり	54
いくつもの谷	56
折々の繁栄	58

プロローグ

Prologue

鉄道に乗って台地をいく



「東西に広がる平川(水平)な台地。各務原台地はそんなイメージでとらえられていますが、本当にそうでしょうか？」

JR 高山線と名鉄各務原線は、都合よく各務原台地を東西に横切っており、それぞれの駅ごとの標高を比べることで、各務原台地の東西の高さを観察することができます。※1

上の図は、JR と名鉄各路線の距離と高さを並べてみたものです。※2 分かりやすいよう、高さは3倍に拡大していますが、台地の東端に比べ西端はかなり低くなっていることがわかります。

台地の東端に位置する羽場駅付近は標高 60m に対し、西端の新加納駅付近は 20m 強でその差はなんと 40m にもなります。車窓から見える風景だけではなかなか気づくことができませんが、意外にも各務原台地は「傾いている」ことがわかります。

※1 駅間別の平均的な標高値を、駅ごとの標高値に見立てています
 ※2 各駅間の距離は実際の駅間距離ではなく、台地上の東西間の幅たりを示しています。

新加納駅へ台地から降りたまる名鉄電車。
 台地東端と比べて高低差は少ないが、見上げる高さに新加納駅のホームが見える。

各務原台地は真っ平ら？

意識しにくい東西の高低差だけでなく、台地上でも線路脇の家並みの屋根が車窓より低かったりすることにも注意を向けてみましょう。

鉄道は大きなアップダウンをすることなく台地上を進んでいきますが、とどこどころで線路脇に低い部分が見られ、鉄道線路はかさ上げされていることがわかります。

どうやら一口に台地と言っても、「平川(水平)な地面が広がっているわけではなさそうです。



羽場駅から台地へ下った名鉄電車。
 右の勾配標識は 33.3 パーセントと示されており、1000m 進む間に 333m 登る(下る)勾配は、各務原線で最も急勾配。

此野に田畠なし

ただ青草のみ生ず

正徳三年（1713）に、貝原益軒によって書かれた『蝦鱒路記（木曾路記）』は、木曾路や東山道、美濃路などの旅の記録をまとめたもので、ここに江戸前期の各務原台地周辺の様子を見ることが出来ます。

益軒が木曾路（中山道）を江戸から京に向かって旅したのは貞享二年（1685）。犬山城を南に見ながら、益軒は各務原台地を西へ進みます。

『鵜沼の西のはづれより西に廣き野有、各務野と云、此邊（このあたり）各務郡なるべし。野の北に各務と云村あり。』

益軒の指す「廣き野」が、各務原台地を指すものと思われまます。益軒はここを「各務野」とし、台地周辺が「各務郡」の領域と記しています。また「野（台地）の北」という各務村は、現在も台地の北に位置する各務地区です。

『各務野ひろさ三里四方有と云、但東西は三里ばかり、南北一里半程にみゆる。』

各務原台地は東西に細長く、「三里四方あるというが、東西三里、南北一里半ほどにみえる」という益軒の見立てでは、実際の距離はともかく台地（野）の形状をよく捉えているといえます。

これに続く記載が各務原台地のかつての姿を探る上でしばしば引き合いに出されるものです。

『此野に田畠なし。たゞ青草のみ生ず。』

田畑としての利用が低く、のちに大砲演習場から現代の飛行場へとつながっていった各務原台地の歩みから、益軒が歩いた当時も荒涼とした空間が広がっていたことを思わせまます。一方で、他の記録からは牛馬の飼料や肥料である林（まぐさ場）としての利用や、新田開発の試みも知ることが出来ます。

田畠なし。たゞ青草のみ生ず。

けしき



貝原益軒座像（福岡市）

貝原益軒

寛永七年、正徳四年（1630-1714）

貝原益軒は、筑前福岡藩士で、江戸時代の本草学者・儒学者。長寿を全うするための心得をまとめた『養生訓』は84歳まで生きた益軒自身の体験にもとづいて書かれており、健康が注目を浴びている今日、ふたたび注目を集めている。旅行を好み、数多くの紀行文を残している。自らの足で歩き目にした事柄を平易な文体で描いている。

Overview

概説

1. 各務原台地とは Kakigahara Plateau



Fig.1 馴染みの各務原市の地図

Fig.1は、観光マップなどで用いられている馴染み深い地図です。そこには、山と川、鉄道や道路が記されていて分かりやすいのですが、各務原台地は表されていません。各務原台地はFig.2の形をしており、Fig.3のような詳細な地形図を見ると明瞭に判別することができます。

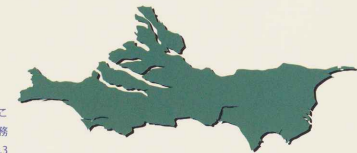


Fig.2 各務原台地の形

台地とは、崖で縁どられ周囲より一段高くなっている平らな地形のことです。各務原台地は、各務原市の中央部に広がる平坦面で、その輪郭は10m前後の崖から成り、周囲の低い地形（河岸段丘）と明瞭に区別することができます。市役所や航空自衛隊岐阜基地は、各務原台地上に位置しています。その規模は、東西11km、南北4km、面積1,900haで、各務原市域の22%を占めています。

各務原台地は、地域の歴史に大きな影響を与えました。この地形は、各務原市の特徴を語るうえで欠くことのできないものです。

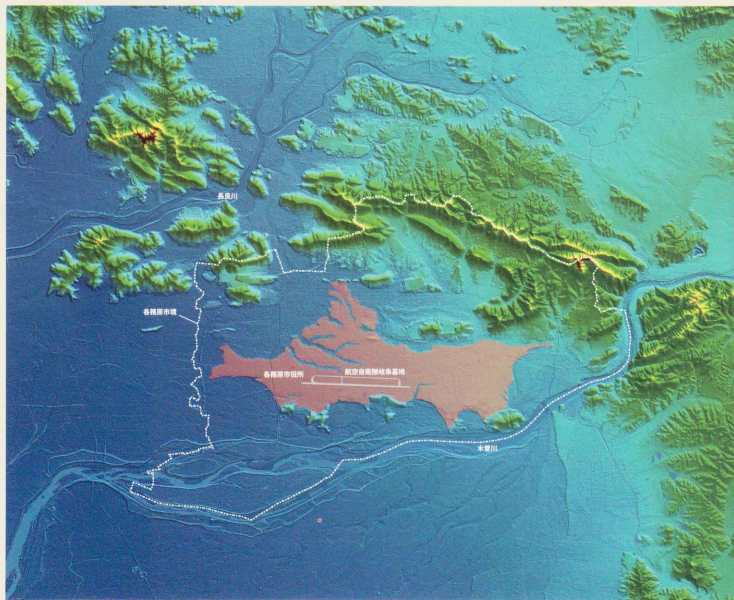


Fig.3 各務原台地周辺の地形詳細

2. 熱田海進による三角州の形成 Atsuta Transgression

海進と海退

地球は長い歴史のなかで、間氷期（温暖期）と氷期（寒冷期）を交互に繰り返してきました。

現在は、間氷期の最中に位置付けられます。海水面が陸地に対して上昇し海岸線が内陸に入り込むことを海進といいます。反対に、海水面が下降し海岸線が沖に退くことを海退といいます（Fig.6）。

海進は、地球全体の気温が上昇することで、陸上の氷が海洋へ溶け出し海水面が上がることで起きます。海退は、その逆の現象になります。

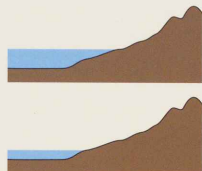


Fig.6 海進（上）と海退（下）モデル図

熱田海進は、およそ14万年前に先氷期が終わって間氷期を迎えた時代に起こりました。海洋の水位が上昇し、濃尾平野の奥まで海水が入り込みました。Fig.4は、Flood Maps というウェブサイト上で、現在の地形に海水面が13m上昇した場合をシミュレーションしたものです。地形は時代とともに変化していますので、熱田海進期の地形には一致しませんが、現在の海岸線（Fig.5）と比べると大体のイメージはつかめると思います。熱田海進期には、各務原台地は海岸線に近接し、木曾川の河口近くに位置していたことが分かります（Fig.4）。そして、各務原台地の元となる三角州が形成されました。

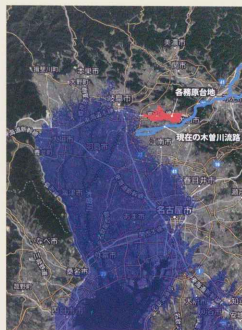


Fig.4 熱田海進の海岸線推定（最大）

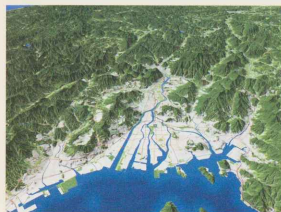


Fig.7 河口三角州の例（広島市太田川の三角州）

三角州

川の水が海へ注ぎ出す河口には、砂が厚く堆積します。上流から転がった石が摩擦して最も細くなり、また海の波に何度も洗われて細かな砂になるのです。

河口では水流が緩やかになるため、川筋は砂の上で複数に枝分かれします。それらの支流に挟まれた砂州は三角形になりやすく、三角州と呼ばれています（Fig.7）。



Fig.5 伊勢湾の海岸線（現在）

各務原台地の表面は、一見すると平らに見えますが、よく見ると凹凸があります。Fig.8は、明治24年の地図に表された等高線から、台地上に残された三角州の形状を推定したものです。



Fig.8 各務原台地の起伏から推定した三角州

3. 各務原層と火山灰 Kakamigahara Layers

各務原層

各務原台地を構成するのは、各務原層です。この層は、およそ 14 万年前の熱田海進期に木曾川が上流から砂礫を運び、河口の三角州に堆積させたものです。

市内には、山の崖面や道路の切り通し面に各務原層の内部を観察できる場所があります。層の特徴は一律ではなく、上下で色が異なったり、礫（川原石）や御嶽山起源の軽石を含んだり幾つかの変化を示しています。



Fig.9 各務原台地上部の断面(市道鶴36号線の工事現場)

Fig.9 は、鶴沼朝日町の市道建設現場で撮影した各務原台地の断面です。上下に色の違いが認められますが、この境が水平に近く、道路面は傾斜して造成されています (Fig.11)。

最上部は耕作土ですが、その直下は本来の表土である黒ボク (俗稱)です。この上層は、腐植性に富み真っ黒な色をしています。次に、火山灰が土壌化した赤土が見られます。これらの層は、各務原台地の形状が完成した約 5 万年前以降に堆積したもので、この台地特有の地層ではありません。

その下位が、各務原層です。主に細かな砂で構成されますが、オレンジ色の箇所が目立っています。よく見ると大小の粒子が識別できますが、これが御嶽山起源のオレンジ軽石です (Fig.10)。約 7 万年前のものだと分析されています。

下層は灰色を示していますが、これは、土中の酸素欠乏による還元により変色したものと考えられます。各務原層は、まだ下方へ深く続いています。

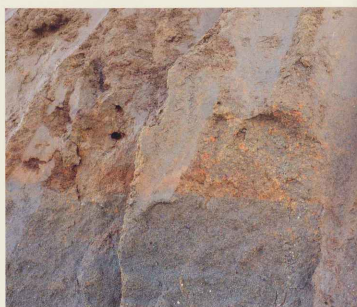


Fig.10 各務原層に含まれる御嶽山起源のオレンジ軽石

火山灰の風成と水成

各務原台地には、火山灰が含まれています。火山から噴出した火山灰は、偏西風に乗って西から東へ拡散します。九州南部に位置する始良カルデラや鬼界カルデラを起源とする火山灰は日本列島の広域に降り積もり、肉眼では確認できませんが各務原台地にも含まれています。土壌の酸性が強い (pH4.6) のは、そのためだと思います。

各務原層には、御嶽山起源のオレンジ軽石も多く含まれています。

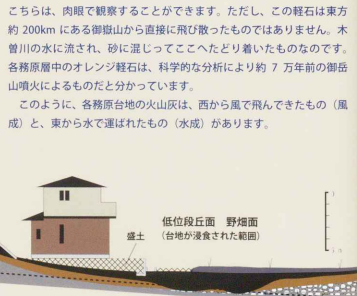


Fig.11 市道鶴36号線建設現場で確認された各務原層断面

4. 浸食による各務原台地の形成 Erosion

各務原層の浸食

地球の歴史は、間氷期 (温暖期) と氷期 (寒冷期) を交互に繰り返してきました。熱田海進の起きた間氷期から次の氷期 (ヴュルム氷期) に入ると、海水面が下がって海岸線は後退し始めます。約 21,000 年前の最寒冷期に、伊勢湾の海水面は現在と比較して 100m 低い位置にあったといわれています。

海水面が下がることによって川の上流と下流の高低差は増し、それまで河口付近に位置した各務原地域は木曾川が勢いよく流れる通過点へと変わりました。そのため、先の間氷期に堆積した各務原層を、今度は削り取りながら新しい河道を刻み込んでいったのです。

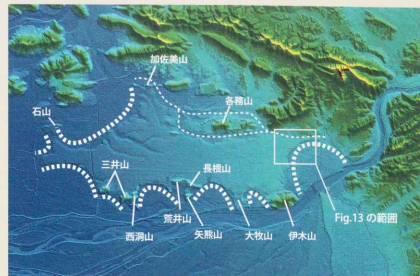


Fig.12 入り江状に浸食を受けた各務原台地

各務原台地の元地形 (各務原層の範囲) は、現在の愛知県犬山市や江南市の方へ広がっていたと思われます。その後、氷期に大きく浸食を受けた各務原台地は、外周の形状に大きな特徴が生じました。それは、入り江のような形をした地形が並ぶことです (Fig.12 中の破線)。この形こそが、木曾川の流れる台地を浸食した痕跡です。台地の南側では、入り江の間に伊木山、大牧山、長根山、荒井山、矢熊山、西洞山、三井山といった岩盤で出来た大小の硬い山塊が並んで存在します。これらが抵抗となって台地の浸食を途中で食い止め、各務原台地の特徴的な形が出来上がったのではないかと考えられます。

台地の北西部については、長良川の浸食作用が考えられます。また、台地北部の低い部分は、熱田海進期の三角州上を流れる一支流の痕跡が、あるいは氷期の浸食時代に木曾川が一時的に台地の北側 (各務山を挟んだ南北)へ回り込んだ痕跡なのかもしれません。

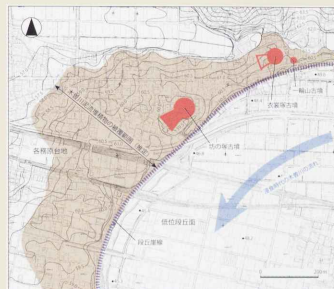


Fig.13 木曾川泥流堆積物の推定範囲と古地図



Fig.14 溶岩や各種の礫を含んで固まった木曾川泥流堆積物



Fig.15 木曾川泥流堆積物の露頭(鶴沼西町)

木曾川泥流堆積物

約 5 万年前、御嶽山の火山口が地震によって崩壊し、大量の火山灰や溶岩などが木曾川の水に溶け、流域の礫を巻き込みながら下流へ移動しました。この土砂の砂を木曾川泥流といい、各務原市域では台地の東端に乗り上げた格好で堆積しています (Fig.13・14・15)。

ということは、台地東端の崖の形は約 5 万年前には出来上がっていたこととなります。この見解により、各務原台地の全体は、この頃に完成したものと考えられます。

木曾川泥流堆積物の範囲は、地形がやや盛り上がっています。その上出来るだけ自立場所所に大型の古墳が造られています。

5. 低位段丘の形成 Lower Terrace

低位段丘とは

入り江の形に浸食された範囲は台地より低くなり、河岸段丘や低位段丘と呼ばれます。台地と段丘の境には崖が線状に形成されます。崖の高さは、鵜沼東部で13m前後です。これだけの高さを侵食したわけですから、水の流力は相当に強かったと想像できます。

侵食の最中でも、豪雨などで水が勢いを増した時は、新たに砂礫を上流から運んで堆積させる場合もあります。このように侵食と堆積を繰り返し、結果的に侵食が進んで地形が低くなり、低位段丘が形成されました。各務原台地を取り巻く低位段丘は、地層によって地下の層位が少し異なることが分かっています。それぞれの形成過程を知るためには、個々に調査・研究していく必要があります。

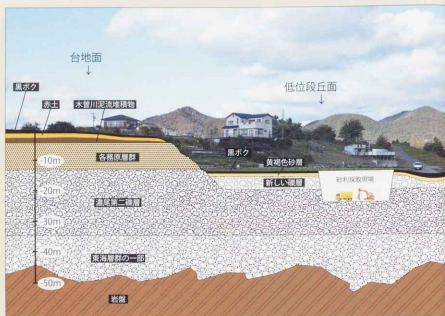


Fig.16 各務原台地(左)と鵜沼東部低位段丘(右)の断面モデル図(台地面は鵜沼沼場、低位段丘面は鵜沼真名越)

鵜沼東部低位段丘

濃尾第二礫層以下は、台地内外で共通している層です。ところが、鵜沼東部低位段丘の範囲においては、氷期に向けて海水面が下がると、木曾川が各務原層の全てと濃尾第二礫層の上部を浸食してしまつたのです。そして、新しい礫層を堆積させます。これらの堆積や堆積が完了しようとする頃に、木曾川泥流が押し寄せ、台地の崖に乗り上げるようにして堆積しました。

その後、低位段丘からは木曾川本流が過ぎ、複数の支流が残ります。全体に流れる緩やかな浸蝕と、砂礫層が厚く堆積したと考えられます。台地の上では、風性火山灰を主とした赤土が堆積しました。やがて低位段丘の陸化が安定し、気候も温暖化していくと、台地の上と同様に、腐植土の堆積が発達して黒ボクに覆われます。



Fig.17 砂利採取現場の様子(鵜沼真名越町)



Fig.18 礫層の色が異なり、下位から水が湧きだしている様子

6. 土地利用から知る水源 Land Use

Fig.19は、明治24年に制作された地図です。まだ飛行場も境川放水路もなく、各務山や三井山は削られずに元の姿のままです。各務原地域の古い時代の様子を伝える貴重な地図です。

この地図を、土地利用毎に色分けしてみました。水田の範囲に注目すると、低位段丘や境川流域、木曾川の旧氾濫原に広がっていることが確認できます。山側では、湧水の流れている谷筋に沿って枝のように細い棚田を築いています。各務原台地においても、水の流れる細い谷筋の一部に水田が認められます。しかし、台地上の大部分には水田は存在していません。これらの事実から、台地は水田耕作に不向きな土地であり、その最大の理由は水源の不足であったと理解できます。他の理由として、土壌の酸性が強いことや、保水性が低いことなども指摘されています。

低位段丘では、島のように小高くなった砂地に畑が、後々まで川の支流が進入し低く水が溜まりやすくなっている所に水田が開かれています。同一の段丘上にも、高低差や土質の違いがあるこ

とを土地の利用形態が教えてくれます。

木曾川の対岸では、愛知県大山市や江南市などを中心に犬山扇状地が広がっています。この地形は、各務原台地が完成した後に形成されたものです。大山市を扇頂部として、木曾川が運んだ土砂が未だかりに堆積しています。扇状地の上には、複数に分岐した木曾川支流の流路が認められ、その川筋に沿って水田が連なっていることが分かります。

三角州と扇状地

三角州は、川が海に流れ出る河口付近に形成されます。これに対し扇状地は、狭小な川幅が一気に広く開放される内陸部に形成されます。木曾川の両岸地域では、上位に海進期(間氷期)の三角州が形成されましたが、その後の海退期(氷期)には大きく浸食されてしまいました。ところが、再び始まった海進期(間氷期=現在進行中)で、低くなった範囲(現各務原台地の南方)に木曾川が新たに土砂を堆積させ、扇状地を形成しました。

人工池

山地部には、人工池が多く見られます。これらは、山からの豊富な湧き水を下位の水田へ供給できるよう貯えておくために作られました。大平の池は、江戸時代から近代にかけて造られたものです。水田耕作にとって、水は非常に重要な資源なのです。

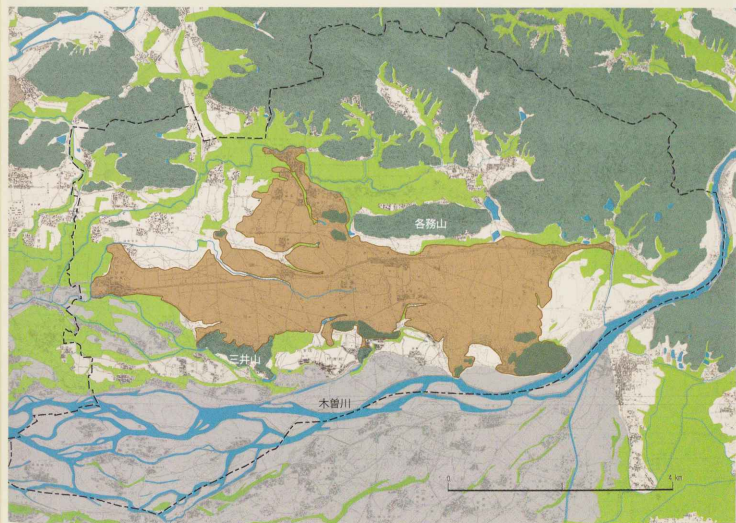


Fig.19 各務原地域の土地利用形態(明治期)

7. 地名 に反映された地形 Geographical Name



Fig.20 地形にまつわる地名の分布(洞・島・欠・市)

地名とは、開拓の歴史のなかで付けられた土地の呼び名です。ある土地のことを一言で表した名称、つまり一定の範囲に見出された土地の特徴が地名に表されています。

各務原市域では、1,200件ほどの小字名が知られています(旧川島町を除く)。そのなかで、地形にまつわる代表的な地名を取り上げてみます(Fig.20)。

洞地名は、山間部で谷間が行き詰まりになるような地形を意味します。各務原市の北部は、複雑に曲がりくねった山の尾根で構成されています。このことから、洞の付く地名が目立っています。欠地名や市地名は、各務原台地に由来する地名です。両方とも、崖や傾斜地の意味があります。特に、各務原台地の南側は木曾川によって浸食された崖が発達していますので、市中、欠下などの地名が多く認められます。

島地名は、海や川に浮かぶ島という意味ではありません。川の洪水の時に浸水しない小高い地形を島と見立てて名付けられました。したがって、島地名は水害に対する安全な場所という、人々の大切な覚えであることが多いです。

このように、洞地名は北部の山地帯、欠・市地名は各務原台

の周辺、島地名は境川流域や木曾川付近の低い土地に多く認められます。各務原の地形の特徴を、地名がよく物語っています。

洞地名	島地名	欠・市地名
1 稲洞	1 外島	1 市中
2 塚洞	2 柳島	2 市中
3 南洞	3 西島	3 市中
4 矢以鏡洞	4 向島前	4 欠ノ上
5 東洞	5 島	5 若手巾下
6 地獄洞	6 大志賀島	6 欠上北
7 洞西	7 寺島	7 欠下
8 洞東	8 島田	8 市中
9 車洞	9 島	9 巾下
10 中口洞	10 西北島	10 巾下
11 東洞	11 北島	11 欠ケ上
12 大安寺洞	12 南北島	12 東欠上
13 中口西洞	13 中之島	13 西欠上
14 東洞東洞	14 中島	14 西欠上
15 半ノ木洞	15 鉄砲島	15 西欠上
16 大安寺洞	16 大島	16 欠上
17 大洞	17 大島	17 東欠下
18 大宇前洞	18 北大島	18 西欠下
19 八重洞	19 向島	19 欠原
20 西洞山	20 田島	20 欠下
21 西洞	21 持田島	21 欠下
22 東洞山		
23 東洞		

Fig.21 洞・島・欠・市地名の詳細

8. 分布図 から見た各務原台地の歴史 Distribution Map

旧石器・縄文・弥生時代

日本列島で人間の生活が始まるのは、約3万5千年前と考えられています。この時代は、石器を主な道具に用いた狩猟採集社会で旧石器時代と区別されます。各務原台地で確認された最も古い石器は、今のところ約2万年前のもので、その後、1万数千年前には石器に加えて

土器や弓を用いる縄文時代が訪れました。この頃から、氷期が終わり気候の温暖化が始まります。狩猟採集社会を中心としつつ途中から農耕も始まったといわれています。約2,300年前(紀元前4世紀頃)になると、中国大陸から朝鮮半島を経由して日本へ稲作文化が伝播します。本格的な農耕社会が始まるこの時代を、弥生時代といいます。

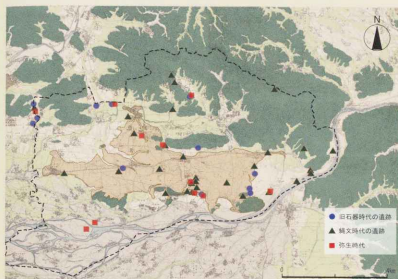


Fig.22 旧石器・縄文・弥生時代の遺跡分布図

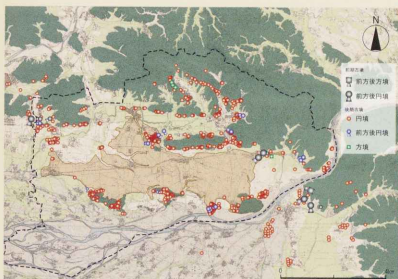


Fig.23 古墳の分布図(古墳時代前期・後期)

旧石器時代の遺跡分布を見ると、人々が洪水を受けにくい台地の縁辺部や木曾川から離れた場所を選んで生活していたことが分かります。この頃は、まだ木曾川の流路が安定していませんでした。

縄文時代になると、木曾川は現在の流路に落ち着きを見始めます。同時に、川に近い低位段丘にも遺跡が出現します。一方では、台地内部にも遺跡が分布するようになります。縄文人が、気候の温暖化に伴い草原とした台地へ行動範囲を拡大させたことを意味します。

弥生時代になると、人々は水田を開くために台地を降りて川の近くへ移動します。そのため、台地の内部には遺跡は確認されません。川の付近は、水が豊富で上流から運ばれた肥沃な土壌や、水を張るために必要な泥土も存在しました。その反面、安全の保証を手放し水害という危機に直面します。以来、大自然との闘いが始まり、人は水害から村や水田を守るために様々な試行錯誤を繰り返していくことになります(Fig.22)。

古墳時代(前期・後期)

農耕社会は人々の生活を豊かにした反面、貧富の差をもたらし支配者層を生み出しました。およそ3世紀後半より、支配者が自らの墳墓として築いたのが古墳です。古墳を権力や富の象徴とした中央集権(ヤマト王権)の時代を、古墳時代といいます。

5世紀末までの古墳時代前期は、首長層が規模の大きい特別な古墳を築きました。各務原台地では、全長120mの坊の塚古墳が最大です。古墳を造る場所は支配地から目立、かつ安定した地盤の土地が選ばれました。この頃の古墳が、丘陵上や河岸段丘の直上に造られているのは、そのためです。

6~7世紀の古墳時代後期になると、全長12m前後の小型の円墳が多数造られるようになりました。この頃の古墳は、

山の裾部に集中して造られることが特徴です。古墳の数は約600基に急増し、前期にはなかった範囲にも分布するようになりました。このことは、新しい技術や道具とともに、特に北部の境川流域を中心に水田開発が進んで人口が増え、農耕集団の群雄割拠する時代が到来したことを意味しています。しかしながら、台地の中央には開拓が及ばなかったため人口密度が低く、古墳も築造されませんでした(Fig.23)。

須恵器の生産

縄文時代以来、人々は焼物（土器）を作り食料の煮炊きや盛つけ、貯蔵などに用いてきました。古墳時代の途中から平安時代の初め頃までは、須恵器が使われました。須恵器とは、4世紀末頃に朝鮮半島から伝播した焼物です。須恵器は、専用の穴窯を用いて1,100℃以上の高温で硬く焼成することが特徴です。須恵器は大量生産され、各地へ流通したり税として都へ納められたりしました。

須恵器生産の拠点となるここでは、窯を築き営むための地質・地形・気候が重要であり、同時に燃料とする木材や良質な陶土などの資材、工人が居住するための環境、出荷のための交通網なども必要です。このような条件が満たされて、各務原台地北部の山地が生産拠点の一つに選ばれたと考えられます（Fig.24）。

須恵器に用いられた粘土は、山間の谷に埋没する蘇原粘土層から採取されました。この粘土層は、約5万年前に木曾川や長良川の川路流路によって形成されたと考えられています。

初期の寺院は、都を経由して輸入された技術・文化を象徴する建築物です。荘厳な塔や金堂を備えた伽藍寺院は、都衛近くの目立つ場所に配置され都市機能の一部を担ったと考えられます。

初期の神社は、人々が願いや気持ちを叫ぶように大きな岩などを崇拝したことから自然に成立していきました。祭神には山の神・水の神・火の神など自然神のほか、祖先を祀る氏神もいました。神社の分布は、台地上ではなく周辺の低い土地に目立ちます。稲作を中心とした村人の祈願活動を知ることができます。

各務原台地を通った主要街道は、8世紀に整備された東山道、17世紀に整備された中山道です。気候や災害によってルートが遮断されることが少ないよう、安全が優先されました。Fig.24を見ると、街道が安定した台地上を少しでも長く通過できるように設定されていることが理解できます。また、縦走する道は木曾川の渡船場へ通じていました。

各務野から各務ヶ原へ

古代に広野と呼ばれ、江戸時代には各務野と呼ばれた広大な台地は、酸性が強く保水性が低いという土壌の性質や、豊富な水源が確保できないことから農業には不向きでした。江戸時代には、一部で水田開発が行われますが、広い農地を開拓することは困難でした。したがって、

米が経済の中心となっていた時代においては、各務原台地は人口密度が低く原野のような光景が広がっていました。

近代を迎えると、広大な台地は大砲射撃場や飛行場という用途に向けて注目され、新たな歴史の展開を見せます。各務野は、開発を受けて各務ヶ原と呼ばれるようになりました。

大正6年、各務ヶ原飛行場は所沢に次いで日本で2番目に開設されました。飛行場は、西・中・東の3箇所から成り、中山道以南の台地南半部に配置されました。原野に近い状態で、土地の起伏が少なかった各務原台地は、飛行場用地に最適と判断されました。東西に長い蒲走路で、偏西風に乗って勢よく飛行することができたと考えられます。

飛行場に隣接して、飛行第一・二連隊の基地、陸軍航空廠、技能者養成所が構えられ、また川崎航空機工業などの飛行機生産工場が進出しました。労働者や物資を移送する鉄道も敷設され、社宅、銭湯、病院、学校も整備されました。こうして、各務原台地の新たな利用が促進され街を形成していったのです（Fig.25）。

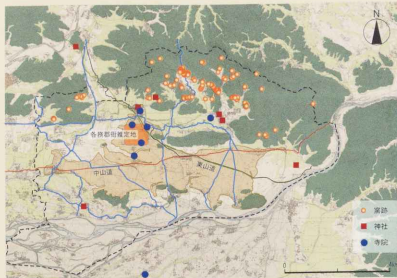


Fig24. 須恵器窯・初期寺院・初期神社の分布図

各務郡衙と古代都市

古代の律令制下では、地方は国・郡・里という行政単位に分けられていました。古代の各務原市域は美濃国各務郡でした。郡の行政機関として、郡衙と呼ばれる施設が整えられました。各務郡衙は、近年の遺跡発掘調査によって各務原台地北東部の蘇原野口周辺（広畑野口遺跡）に所在していたことが明らかになってきました。台地が半島状に切り込まれた一帯の約100haには、郡衙を中心に一定の古代都市が建設されたと想像されます。

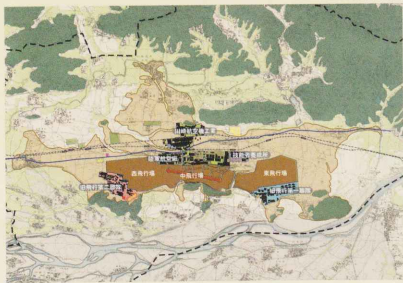


Fig25. 近代の飛行場と関連施設分布図



基調講演

演題 経済学と政治の中での中央銀行の役割

講演者 日本銀行 理事 藤野 洋

講演時間 10月10日 14時

講演場所 日本銀行 本館 10階

講演言語 日本語

講演形式 講演

講演料 無料

申し込み 日本銀行 総務課

申し込み先



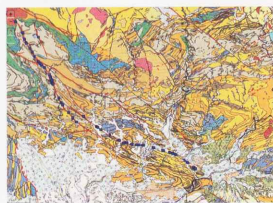
各務原台地の生い立ちと生活環境

小井土 由光 (岐阜大学名誉教授)

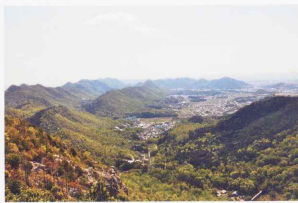
- I. 山地部の地質特性と生活環境
- II. 台地部の生い立ちと地質特性
- III. 台地周辺の水環境と生活環境
- IV. まとめ

I 山地部の地質特性と生活環境

1 各務原地域の山地

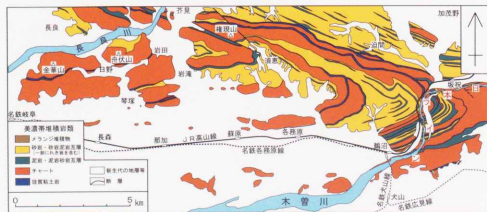


長良川～根尾川流域の地質詳細図
(「ジオランドぎふ」による)



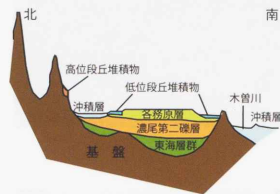
組織地形 (撮影: 田辺元祥)

2 地質特性と生活環境



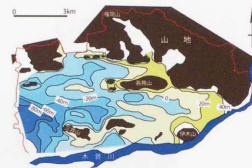
各務原市地域の地質概要図
(吉田・藤田 1999)

II 台地部の生い立ちと地質特性



各務原台地の模式断面図
(横山・牧野内 1991)

- 1 東海層群 (土岐砂礫層)
- 2 濃尾第2礫層

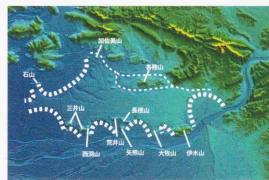


濃尾第2礫層の基底面の形状
(横山・牧野内 1991)

3 木曾谷



古木曾川の流路



侵食された各務原台地

4 木曾川泥流堆積物



5 低位段丘堆積物

6 現河床堆積物



後背湿地



自然堤防

III 台地周辺の水環境と生活環境

1 台地周辺の水環境

非利水域

間接利水域

直接利水域

洪水域

2 台地周辺の水環境と遺跡分布

3 台地周辺の水環境と古墳分布

4 台地周辺の水環境とわれわれの生活

IV まとめ



プレゼンテーション

本シンポジウムにさきがけて開催した、「各務原台地ゼミナール」での講演を、歴史民俗資料館で講演要録としてまとめ、プレゼンテーションの参考資料として掲載します。以下の講演要録は、歴史民俗資料館で作成したもので、文責は資料館にあります。

各務原台地と中山道

2016.9.25 各務原台地ゼミナール
丸山幸太郎（岐阜女子大学 地域文化研究所長）

各務原台地は不毛の土地か

正徳三年(1713)に貝原益軒が著した『岐路記』には、各務原あたりを旅した記述に「此野に田畑なし、ただ青草のみ生ず」とされている。本当に各務原台地は、不毛の土地であったのだろうか。



中山道から南三井山方面を見た絵図 (横山恒雄家文書)
中山道ぞいの松並木のほか、台地上には松が散見されるのみ

別の資料には、台地上が畑地で利用されていたという記録も見える。田畑のみならず、草地や雑木林などが台地場に存在し、それぞれ肥料や採薪地として、人々に利用されていた。

近世までの各務原台地の歩み

各務原台地は、古代以来、東西交通の要衝として機能してきた。古代においては東山道が、中世には河川交通が大いに機能したことが記録に見え、また近世には中山道が機能してきた。現代には国道21号線や関・江南線、東海北陸自動車道がつけられ、市の基幹交通路として機能している。

近世における台地の開発

慶長元年(1596)の野村での新田開発以降、各務原台地周辺の新田開発は近世を通して続けられてきたが、台地東半部の内野・三ツ池を除き、特に西半部においては成果をあげるまでには至っていない。新田開発が進まなかった原因は、土地の条件もさることながら、各務原における領主支配もその一因として考えられる。



近世における領村の分布

各務原台地上は、大きく西半部の旗本領と東半部の尾張藩領に二分されており、尾張藩領である東半部では貢納搾取が緩やかであったことも影響しているだろう。

近世における生業

各村から領主に出された明細帳からは、村々の生業を読み解くことができる。これによれば、各務原の村々では中山道の通行の人馬(輸送)の賃銭や、薪・柴取りとといった山稼ぎ、木綿栽培、木綿・絹織りなどの農閑業をみることができ、他にも木曾川の舟運などもあるが、生業の中心とするにはささやかである。

まだ江戸期の生活を継承している当地の明治初期の史料に、民俗事例として記録が残っており、そこから「中山道」を行き交った物資の流通が盛んに行われていたことがうかがわれる。

台地を通った公幹道・中山道

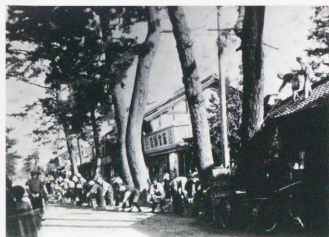
中山道以前、古代においては東山道が貢納道や進軍道などとして機能していた。中山道では公道の機能に加えて、商業ルート、観光道の機能も加え、南北民間道と交差することで、各地に経済圏を成立させている。

現在の各務原市域においては、西に「間の宿」としての新加納が、東に「鶴沼宿」をおき、この間に「新加納」「六軒」「山の前」の一里塚が位置していた。

中山道の概要

正式な宿場である「鶴沼宿」は、西へは加納宿へ四里十町(約17km)、東の太田宿へは二里九町を数える。加納宿へは、中山道の宿場間で最長であり、それゆえ正式な宿場ではない間の宿である新加納が中間に成立している。

加納からは各務原台地への登りとなる新加納あたりを除けばごく平坦で、籠も行き来するところであった。道幅3間の両側に松並木が並んだ中山道の変は、昭和10年代までその姿をとどめていたという。



現在的那加東那加町あたりの中山道風景 (昭和15年頃)

一方、鶴沼宿から太田宿では、この間に「うとう峠」の難所を挟むため、籠での行き来はできなかった。

中山道開道当時の道筋は、現在の鶴沼古市町町から鶴沼南町を経て木曾川を渡河し、犬山から上田へ抜けるルートであったが、慶安4年(1651)に中山道の道筋が付け替えられ、うとう峠を超えるルートに変更された。これにともない、宿場も鶴沼南町から、東町・西町へ移ることとなった。

中山道を行き交った人々

鶴沼宿には、彦根井伊家などの大名行列はもちろん、芭蕉も投宿するなど、多くの人々が来訪している。

各務原台地を横断する中山道は、当時の主要交通路である。それゆえ多くの人が各務原台地を往来している。幕府測量方で全国を測量して回った伊能忠敬(文化6・1809通行)や、幕末の水戸藩天狗党の首領である武田耕雲斎一行(元治元・1864宿泊)なども各務原台地を通っていた記録がある。

中山道は、河川の渡河が多少東海道を避ける姫宮のお奥入れにも使われた。公武合体の力を天下に示すために京都から江戸に奥入れを行った皇女和宮も、文久元年(1861)、鶴沼宿で休息をとっている。

中山道の活用へ

- 1 歴史的景観整備
松並木の復元、
寛政の分間絵図「鶴沼宿」の絵図看版
- 2 食文化復活
- 3 資料館の充実
御嵩宿・太田宿・中津川宿
- 4 イベントの拡充
- 5 物語(ストーリー、ソフト)化と活用
「街道物語」本作製・刊行

各務原市域の中山道は、一部は国道として現代にも基幹道として活用されている。中山道沿線では各地の宿場町を中心に街道文化の発信を行っており、地域の変遷過程の解明と並行して、各務原台地を通る中山道のさらなる活用を期待している。



坪内嘉兵衛と家族（明治7年ころ） 代々、鉄砲頭を世襲し、新政府でも大砲方を務めた。

大砲演習場



飛行場へ



所沢より飛来した飛行機（大正6年）



各務ヶ原飛行場（大正8年）



西飛行場へつめかけた見学者（昭和6年頃）

坪内氏が大砲練習場として利用

・外国船打ち払いのための
大砲練習場として幕府に願い出る

大政奉還

大砲の試発

・笠松県役所に申し出て許可

陸軍省が大砲射的場をつくる

・新加納村など9カ村から陸軍省へ、
三井山麓から三池浦新田までの土地を譲渡

大砲射的場の拡大

・更木8カ村などの入会地が買上げられ演習場を拡大

大砲実弾演習の中止 一般の演習場へ

・大砲の威力拡大に伴う危険性の増大

歩兵の演習場へ

・歩兵第六十八連隊（比長森）の練兵場

演習場廃止

各務ヶ原飛行場の完成

・所沢飛行場よりモリスファルマン式機飛来

所沢より航空第二大隊が移駐

陸軍航空本部補給部各務原支部の設立

・航空第一大隊も那加村に移駐

航空機材の修理開始

飛行大隊が連隊に昇格

・陸軍は昭和元年までに8つの飛行連隊を設けるが、
二個連隊常駐は各務原のみ

補給部各務原支部が陸軍航空支廠に昇格

日中戦争

ノモンハン事件

・飛行第一連隊はノモンハンへ、その後南方戦線へ

陸軍航空支廠技能者養成所の開設

太平洋戦争

飛行第一戦隊はチチハルへ

B29 初飛来

各務原大空襲

嘉永年間
1848-54

慶応3年
1867

明治3年
1870

明治12年
1879

明治22年
1889

明治32年
1899

明治41年
1908

明治44年
1911

大正6年
1917

大正7年
1918

大正9年
1920

大正13年
1924

大正14年
1925

昭和10年
1935

昭和14年
1939

昭和16年
1941

昭和18年
1943

昭和19年
1944

昭和20年
1945

江戸

明治

大正

昭和

近代における各務原台地の開発

～各務原飛行場の開設とその変遷～

2016.7.24 各務原台地セミナー
鷺見隆司（垂井町立東小学校長）

江戸時代の技術では開拓の手が及ばなかった各務原台地も、明治以降、その広大な空間を生かし、大砲演習場から飛行場へと活用されていきます。今日の各務原市の発展につながる、航空宇宙産業の集積やそれにともなう人口の増加、交通機関の発達などは、いずれも近代の発展の中で、飛行場の存在が牽引していったものと言えます。

1903 ライト兄弟による飛行機の初飛行

明治44年 所沢に日本初の飛行場ができる
1911

1918 第一次世界大戦終結

大正9年 国鉄高山線の開通（岐阜—各務ヶ原）
1920

大正10年 川崎造船所が飛行機部各務原分工場を設置
1921 高山線延伸（各務ヶ原—美濃太田）

昭和2年 三菱内燃機（株）名古屋製作所各務原格納庫設立
1927

昭和3年 私鉄各務原鉄道の開通
1928

昭和12年 川崎航空機工業各務原工場の設立
1937

・1,200名あまりが神戸から移住
・ほかに（株）各務原精機製作所など航空機部品製造工場なども

昭和15年 那加町制施行
1940

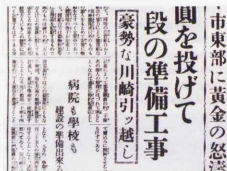
昭和18年 蘇原町・鷺沼町制施行
1943

昭和20年 飛行場を米軍が接収
1945

航空機産業の発展

交通機関の発達

人口増加



川崎航空機の設立により、神戸から多くの従業員が各務原へ（昭和12年）

遺跡に学ぶ防災

～東北大震災の復興現場から～

2016.9.4 各務原台地ゼミナール

服部哲也

(NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク副理事長)

なぜ遺跡の調査が復興支援か

平成 26 年から翌 27 年にかけて、東日本大震災の復興支援として、名古屋市教育委員会から宮古市へ派遣され、遺跡の発掘調査に従事した。津波による被害を受けた地区では高台への集団移転が計画され、移転地での住宅等の建設に先駆け、この高台に存在する遺跡の発掘調査が進められている。

こうした遺跡の調査からは、先人たちの災害への備えを垣間見ることができる。それらを明らかにするとともに、「災害を忘れない」「語り伝える」物語としていくところこそが、被災地での支援活動で「学んだ」ことであり、これからもこの土地で暮らす人々への復興支援となることを感じた。

宮古市での被害状況



津波は瞬く間に防潮堤を超えた

宮古市役所4階より撮影(「広報みやこ」より)

- 地震発生日時 平成23年3月11日(金)午後2時46分ごろ
- 最大震度 震度5強
- 最大波到達時刻/高さ 午後3時26分/8.5m以上
- 最大遡上高 40.5m(重茂・姉吉地区)
※各務原台地 標高30m～60m
- 人的被害 死者517人
- 住居等被害 全壊5,968 半壊等3,120

遺跡は被災しなかった

防災集団移転促進事業による高台移転の対象地となった赤前山遺跡、津波復興拠点整備事業の対象地となった津軽石大森遺跡のいずれも、今回の津波被害の浸水域から外れており、先人たちが津波被害を受けない場所で生活していたことがわかった。



赤色が津波の浸水域 灰色が遺跡の範囲
(宮古市教育委員会作成図に加筆)

本日に古代人は津波被害にあわない場所を選んでいたので確かめるため、宮城県・岩手県の国史跡具塚をめぐってみたいところ、いずれも今回の津波被害を受けていないことがわかった。里浜(海)に暮らす縄文人は、海の恵みを生活の糧としながらも、居住域は津波被害の及ばぬ場所を選択した「職住分離の暮らし」を営んでいたことが分かった。

発掘調査はその土地の災害の歴史を明らかにできる。土地の災害の歴史を明らかにすることは、将来の災害予測になる。先人の営みを発掘調査などによってひもとくことによって、災害への対応を学ぶことができる。

災害は津波だけではない

2万人近くの人々の被害をもたらした東日本大震災における津波にとどまらず、自然災害はたびたび私たちの暮らしを襲っている。

津波	東北大震災	平成23年3月	19,418人
	上石流	広島 平成26年8月	74人
	火山噴火	御嶽山 平成26年9月	63人
	地震	熊本地震 平成28年4月	50人
	台風	伊勢湾台風 昭和34年	5,098人
		台風10号 平成28年8月	16人以上

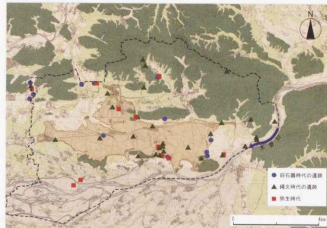
発掘調査からは、過去にどのような災害があったのかを知ることができる。



住居跡の中に降り積もった火山灰の分析から、5,400年前の噴火の状況を知ることができる。

各務原台地の遺跡分布

各務原市域における縄文時代の遺跡分布を見ると、台地縁辺に所在することが多く、一方で弥生時代には伊八島河床遺跡-弥生衛島遺跡など、台地下にも遺跡が宮まれていることがわかる。弥生時代には稲作が導入され、水田経営のために水害の危険性と引き換えに、人々は台地下に降りていったと考えられる。東北での経験から、高台移転に縄文時代の暮らしより、大防潮堤による自然のコントロールの試みに弥生人の暮らし方がだぶって見える。



生活に不可欠な水の確保が難しい台地の上で、縄文人たちはどのように生活していたのか、彼らの生活を支える自然の恵みは台地の上にあったのかなど、今後も遺跡の発掘調査から解明すべきことは多い。

土地の災害の歴史を知る・忘れない

災害は繰り返し訪れる。将来の災害に備えるために、その土地の災害の歴史を知り、それを語り継いでいくことは重要である。災害の悲惨さが忘れられ、伝えられていかないと、被災は繰り返す。



津波により児童 74 名、教職員 10 名が亡くなった石巻市の大川小学校



津波に飲み込まれる直前まで、職員が町民に繰り返し避難を呼びかけ続けた南三陸町の防災対策庁舎



度重なる津波被害から「此処より下に家を建てるな」と伝える石碑(姉吉地区)

各務原台地とその周辺の里山

～自然と人々の暮らし～

本要録は歴史民俗資料館で作成し、講演者が監修・指導したものです。

2016.10.30 各務原台地ゼミナール

柳沢 直 (岐阜県森林文化アカデミー 准教授)

各務原台地の植生

開発のすすんだ現代の各務原台地において、植物・植生について語ることは困難を極める。市街地化された台地上では、緑そのものが少ない。

各務原台地そのものだけでなく、周辺の地形を含めた植生を考えていくことで、自然と人々の暮らしをひもといきたい。

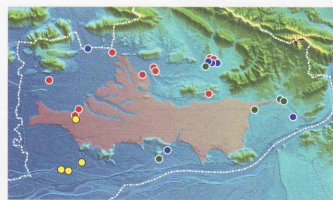
開発の手が入る前の各務原台地の植生を考えるために、各務原市で同行された『かみかみはら巨大・名木めぐり』から手がかりを探っていく。巨大は樹齢が100年を超えるものも多く、過去の植生を考える上での参考となるかもしれない。『巨大・名木めぐり』に記載された33種の中から、人の手によって植えられたものでない、自然植生を反映しているような4種をとりあげて考察した。



● ツブラジイ



● クスノキ



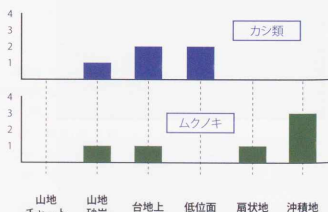
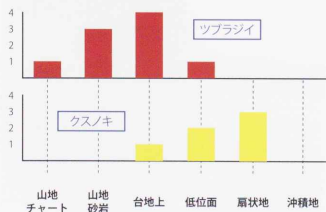
台地上には巨大はほとんど見られない



● アラカシ



● ムクノキ



シイはチャートを基盤岩とする山地上にも出現し、幅広い生育適性を反映していた。深根性のカシ類は土壌の浅いチャートを基盤とする山地上には見られなかった。一方でクスノキ・ムクノキはそれぞれ台地上から扇状地、沖積地まで出現していた。ムクノキは段丘崖にも見られたが、沖積地で最も多かった。これは水と深い生育基盤を必要とするムクノキの特性を示していると考えられる。

台地の土壌

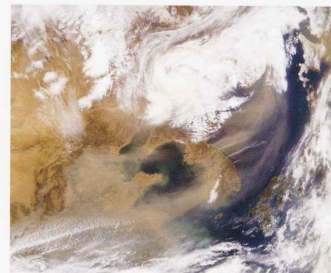
台地をおおう土壌について、近年その生成について興味深い論説が発表されている(山野井2015)。それによれば、大陸の黄河流域の黄土が風に乗って日本に飛来し堆積したという。各務原台地の表層に関しても、この黄砂を母材とした土壌が、河川の浸食などを受けず、堆積している可能性がある。



段丘崖の竹林 (羽場町)



ムクノキ (羽場町)



2000年4月に観測された黄砂

実際に各務原台地を巡ってみると、段丘崖に竹林やムクノキの群落が目立っている。エノキやアベマキなども認められ、段丘崖では水をおむ植物の生育に適した地質上の特性があるのかもしれません。今後の研究課題といえる。また、アベマキは本来、極相林で見受けられる植物ではないが、薪材として盛んに利用されることから、人々の利用に供されていた可能性も考えられる。

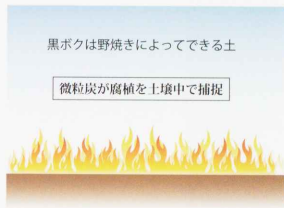
過去の台地の植生を探る

開発の手が入る前の各務原台地にどのような植物が生育していたかを知るために、明治29年(1896)に測量された地図から当時の土地利用をみてみよう。



明治29年における土地利用

江戸時代に書かれた書物(道州徇行記)にも、柿沢村について「四方が草野で松林が多く、村として成りにくい」とある。また、8世紀中頃の台地上的遺跡の発掘現場で見つかった炭化材からはクスノキの樹木(アベマキかクスノキ)が利用されていたことがわかった。



台地と人々の暮らし

一般に里山は水田耕作を目的として構成された生態系の集まりであるが、水田耕作ができない各務原台地については、周辺の里山林と並んで燃料となる薪材の供給や、田畑に肥料、または家畜に餌を供給するための草として利用を中心として、私たちの生活とつながっていたと考えられる。

基礎知識

基礎知識

台地とは

「各務原台地」を含む、日本の「台地」は、主に洪積台地と呼ばれるもので、氷河期の海水面の低下によって、河川の侵食で削り残され、周囲より相対的に高くなった地形をさします。荒川と多摩川に開まれた武蔵野台地や、大阪城がのる上町台地などの台地があり、主に畑作や果樹園などに利用されています。お茶の栽培で有名な牧之原台地、三方原台地など有名です。

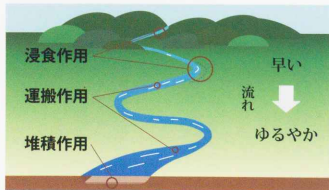
このほかに、火山の噴火にともなう火砕流などの堆積による「溶岩台地」や、地震変動によって高くなった部分か河川等の侵食で削り残され台地などもあります。

世界に目を向ければ、「ギアナ高地」や「コロラド高原」と認識されるような、高く広大な平坦面をもつ地形を「台地」としてとらえており、注意が必要です。

川のはたらき

わたしたちが現在見ている山や谷などの地形を形づくる「力」のひとつに、流れる水・川のはたらきがあります。川には大きく3つの「はたらき」があり、「浸食作用」「運搬作用」「堆積作用」と呼ばれています。

流れる水が川岸や川底を削るのが「浸食作用」です。削られた土や砂、礫などは「運搬作用」により下流へと運ばれます。流れが緩やかになる下流では、「運搬作用」が弱まり、運ばれた土や砂などを川底に「堆積」させ、扇状地や河口近くの三角洲を形成します。



氷河期

氷河期は、地球上で氷河で幅広く覆われた時代をさしています。実際には、より寒冷的な「氷期」と比較的暖かい「間氷期」で構成されています。大規模な氷河期は今から約1万年前に終わり、これ以前を「最終氷期」、これ以降を「後氷期」と呼ぶこともあります。今も南極などが氷でおおわれており、現在は「間氷期」にあたる期間とも考えられています。

最近の氷期には、古いものから

- ギュンツ氷期 47～33万年前
- ミンデル氷期 30～23万年前
- リス氷期 18～13万年前
- ヴュルム氷期 7万年～1万5千年前

があり、それぞれの氷期の間に間氷期をはさんでいます。

氷期には、地球上の水は氷として固定され、海水面が下がることで、海岸線は沖合いに後退します。逆に間氷期には、氷が溶け出し、海水面が上昇、陸地の奥深くまで海岸線が入り込みます。およそ1万8千年前の最終氷期最盛期と、6千年前の温暖な時代を比較すると、海水面は120m以上も上昇したとされており、この間にも海水面は上下を繰り返していました。

更新世
リス氷期
ヴュルム氷期

完新世

約12万年前前後

現在の濃尾平野奥部まで海水が侵入(熱田海進)
※河口付近で形成された三角洲が各務原台地のもと

約5万年前前後

古木曽川の泥流が台地上にかぶる

約2万年前前後

海水面低下により、古木曽川が台地を削り残す

約1万年前前後

ヨーロッパ大陸をおおう氷河が消滅
※山岳地帯には現在までも氷河は残る

約5千年前前後

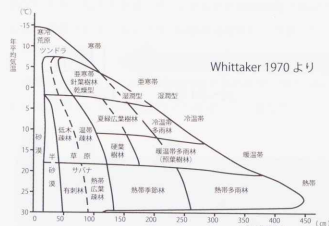
再び現在の大型市付近まで海水が侵入(縄文海進)

※分岐道路で縄文人が移す(縄文時代初期)

現代

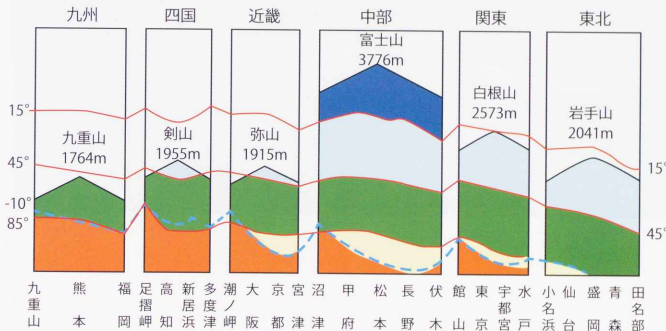
バイオーム(生物群系)

地球上のさまざまな環境では、それぞれに特有の生物たちが生きていて、バイオーム(生物群系)と呼ばれています。それぞれのバイオームの中心となるのが、植物です。どこにどのような植物が生えるのか、バイオームは主に年平均気温と年間降水量によって分かれています。



垂直分布

温暖帯 中間温帯 温帯 寒帯 高山帯



南北に長い日本列島は、緯度による気温の差によって南北方向に異なるバイオームが分布しています。これを「水平分布」といい、また中央部に高い山々が連なることから低地から高地にかけての温度差による「垂直分布」も見られます。

岐阜県は水平分布上は、主に落葉広葉樹と常緑広葉樹が広がっていますが、標高0mの低海拔地から標高3,000mに達する山岳地帯までを含んでおり、垂直方向も変化に富んだ植物の生育環境となっています。

水平分布

- 高山植生
- 亜高山(亜寒帯) 針葉樹林
- 針広混交林
- 落葉広葉樹林
- モミ・ツガ林
- 常緑広葉樹林

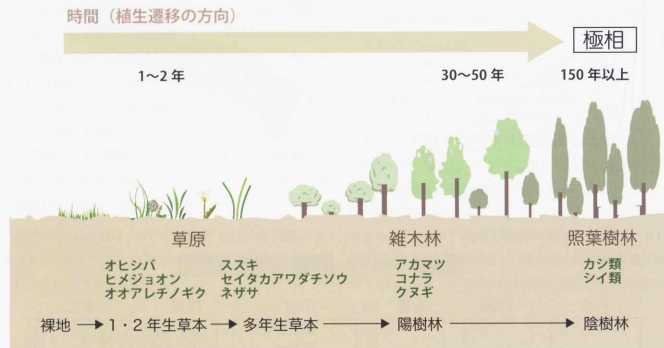


「日本の主な植生分布」
(吉岡1973を一部改変)

植生遷移

火山が噴き出した溶岩が固まった大地や、川や海が干上がって陸上化したところなど、むきだしの岩や土の土地は、時間の経過とともに、そこで生育する植物も移り変わっていきます。これを植生遷移と呼び、開発などの人の手が加わったりすることなく進んでいけば、最終段階には極相と呼ばれる状態に安定します。

極相状態にある植物群落は、その土地の気候・環境によって異なります。土がほとんどなく雨の少ない乾燥地など、植物の生育に適さない環境では、陰樹林を形成するまでにいたらず、松林のまま安定する場合があります。



関東を含む西日本の低地における植生の遷移。おおよその目安として裸地の状態からの経過年数を入れた

東山道と中山道

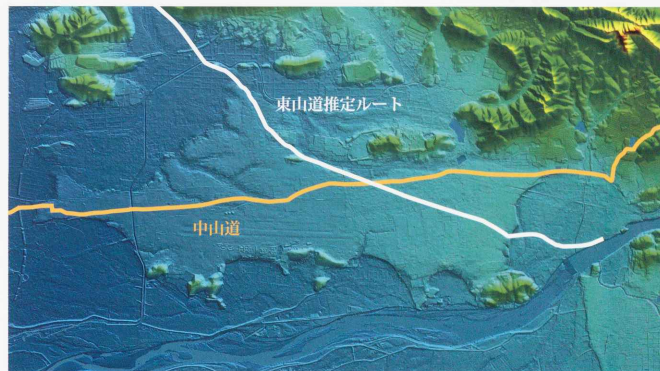
律令期に整備された古代の官道のひとつ「東山道」は、各務原市域においては、古代寺院の集中する蘇原地区を通っていったことがよく知られています。

中央と地方を結ぶ主要道であり、約16kmごとに「駅家」という中継地が整備され、駅家において馬を乗り継いで、情報や物がいち早く伝えられました。できるだけ最短距離で結ばれるよう整備されていることも、伝達の迅速性に役買っていたとされます。

各務原市域においては、各務原台地を斜めに突っ切り、西は方県駅（岐阜）へ、東は可見駅へとつながっていました。

中山道は、近世になり五街道のひとつとして整備されたもので、鶴沼宿に本陣・脇本陣がおかれ、新加納などに立場という休憩地、街道に沿った松並木が植えられました。

当初の中山道は、かつての東山道と同様、台地中央部から鶴沼の渡河地点をつないでおり、鶴沼宿も木曾川べりにありました。やがて、うとう坂の峠越えができるようになると、ルートも変更され、宿場も現在見ることができる鶴沼西町あたりに移り、台地を東西に横切る形になりました。



各務原台地を知るための

基礎知識

訪ねてみよう

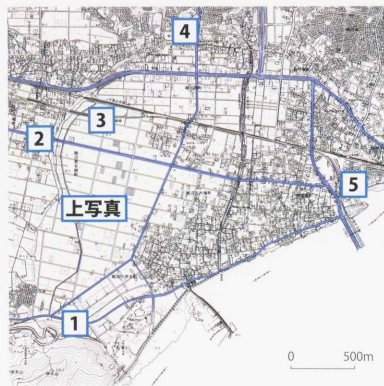
台地と人々の歩み

台地の高さを体感する

各務原台地東縁あたり



急坂は自転車に乗っては登ることができず、一步一歩押してあがるしかできません。籠や荷車を押した、台地の縁を上り下りする人たちと同じ風景がそこにあります。



収録されているスポットには、民有地も含まれます。許可なく立ち入りはしないでください。

1 伊木の森展望台

各務原台地を体感できるスポットとしてまず挙げられるのは、台地東縁の比高差を一望できる伊木の森展望台からの眺めです。にんじん畑が広がる低位面と台地の境界には、湾曲した段丘崖が続いています。竹林などが縁どる段丘崖のところどころで、JR線や名鉄線の勾配、台地から低位面に降りる道路の傾斜に、各務原台地の高さを実感することができます。カメラの望遠レンズで段丘崖を観察してみましょう。

2 にんじん通り

いつもは車で通ってしまう道を、たまには徒歩や自転車を使って台地の高さを体感するのはいかがでしょうか。各務原台地中央から新瀬沼駅へにつながる「にんじん通り」は、台地を直線的に駆けおりていきます。両側の切り通しから、台地の高さがわかります。ここからは木曾川にかかる犬山橋も遠望できます。かつての本曾川が台地を削り残した時には、この台地下すくまで、川の流れが追っていました。

3 名鉄羽場駅東

鉄道ファンならずとも一度は見てみたいのが、名鉄羽場駅と瀬沼宿駅の間、台地を降りる各務原線最急勾配です。実は山岳路線なみの勾配は、線路の傍らにある勾配標の33.3パーミルという数字にはつきりとあらわれています。パーミルは、1,000m進む間に登る(下る)高さを表す単位で、ここでは1kmあたり33.3mといえますから、かなりの急勾配であることがわかります。

4 木曾川泥流堆積物

いまだ記憶に新しい御岳火山の噴火災害。約5万年前に起こった火山泥流の痕跡が、各務原台地の東縁に残っています。火山泥流とは崩壊した火山堆積物が水とともに泥の流れとなって押し寄せるもので、木曾川泥流堆積物は約200kmにも及ぶ距離を流れ、台地の東縁に乗り上げるようにかぶりました。硬く固結してコンクリート並の強度です。

5 城山

犬山橋右岸にそびえる城山は、戦国期に織田信長的美濃侵攻に対峙した木曾川沿いの山城ひとつ、瀬沼城が存在したといわれています。城山の北西麓はかつて志水谷と呼ばれ、清水の古地名が残っています。城山の麓に入り込んだ木曾川の流れば、古木曾川によって削られ残った各務原台地の成り立ちをイメージするには、うってつけです。





台地から 見おろす 縁辺の古墳

各務原台地の縁辺にはいくつもの古墳が築かれています。ムラから見上げるシンボルとして、あるいは木曽川の河川交通に目を光らせる存在にはうってつけの立地です。



収録されているスポットには、民有地も含まれます。許可なく立ち入りはしないでください。

1 坊の塚古墳

県指定史跡

岐阜県下第2位の規模を誇る前方後円墳「坊の塚古墳」は、平成27年度はじめに古墳本体に正式な発掘調査が入り、古墳の表面を覆う葺石が築造当時を思わせる良好な状態で残っていたことや、埋葬主体の蓋石の一部が見つかるなど、貴重な成果を残しました。今は緑生い茂る古墳も、かつては葺石で覆われた人工構造物としてそびえ、台地の下から見上げられていたことでしょう。



2 衣裳塚古墳

県指定史跡

坊の塚古墳の北東に位置する衣裳塚古墳は、現存部で直径52m、高さ7mをはかり、美濃地方最大の円墳と言われます。これまで正式な発掘調査は行われておらず、西側に前方部を付設する前方後円墳の可能性も指摘されています。かつては衣裳塚古墳のさらに東に、三角縁神獣鏡を出土したとされる一輪山古墳なども存在していました。いずれも台地の縁辺に位置しています。



3 大牧1号墳

市指定史跡

各務原台地が木曽川に向かい、岬のように突き出た突端に位置しています。陵南小学校建設にあたり発掘調査が行われ、現在も学校敷地内で整備保存されています。古墳築造が下火になる古墳時代終りごろの築造ながら、組合式石棺を納め、多量の武具・馬具を副葬した大型の古墳であり、木曽川一帯に勢力を誇る被葬者であったことがわかります。周辺にはふな塚古墳など、多くの古墳が大牧古墳群を形成していました。



4 大伊木山西古墳

市指定史跡

各務原台地南縁をたどる、県道95号芋島鶴沼線(木曽川街道)の道沿いに所在する古墳です。昭和の初めには開墾により墳丘を失っていたとされ、今も横穴式石室の天井石や側壁が露出しています。全長10m以上と推定される石室から考えて、墳丘も20m以上の大型の古墳であったと考えられます。



5 金縄塚古墳

市指定史跡

鶴沼地区東部の丘陵突端に所在する金縄塚古墳もまた、台地縁辺の古墳と同様、低地を見下ろす高台が築造場所として選ばれた古墳です。正式な発掘調査はなされていませんが、墳丘の中央部が大きく削りとられており、古墳時代前期の竪穴式石室を有する古墳と考えられます。江戸時代に書かれた「濃州御行記」には「金の縄や朱、焼き物の蓋などが見つかった」とあり、金縄塚古墳の名の由来となっています。

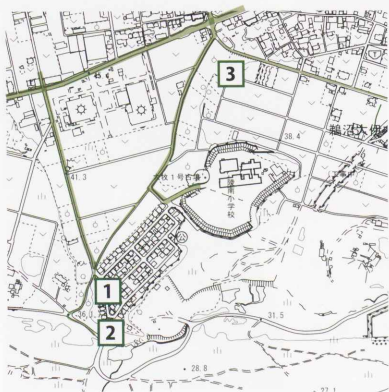


水が生み出した台地



川は水だけでなく、上流からさまざまなものを運んできます。今は川よりもずっと高い場所にある各務原台地も、水によって運ばれてきた砂から形作られています。

(上・昭和のはじめころの木曾川の写真)



収録されているスポットには、民有地も含まれます。許可なく立ち入りはしないでください。

1 木曾谷層

陵南小学校や大牧団地のあたりは、木曾川に向かって岬のように突き出たところです。大牧団地脇の小径を木曾川に向かってすすんでいくと、ちょうど大牧団地の乗る地面の下に、「台地の中身」が見える場所があります。粗い砂粒の中にオレンジ色の軽石が混じり、よく観察すると、運ばれてきた水の流れを思わせる折り重なった筋模様を見ることができます。

この砂の層は木曾谷層あるいは各務原層と呼ばれる、各務原台地の大部分は、この砂の層でできています。およそ9万～7万年ごろ、比較的暖かい間氷期の時期に、この近くまで入り込んでいた海の河口付近で木曾川が運んできた砂がたまったものです。含まれているオレンジ色の軽石は御岳山が起源で、砂粒とともに木曾川によって運ばれ、木曾谷層の特徴になっています。

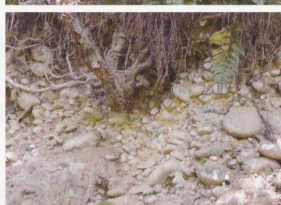


2 犬山礫層

木曾谷層が見られる場所から、さらに木曾川へ向かって小径をすすんでいくと、北側の崖面には、先ほどとは違い、5～20cmほどの丸い河原石を大量に含む断面を見ることができま

す。これを犬山層と呼び、各務原台地の縁辺のやや低い部分や対岸の犬山にも広がっています。河口近くで細かい砂粒からなる木曾谷層を堆積させていたところが、新たに木曾川の流れて削られ、そこに河原石が運ばれてきたものです。

河原石の種類や大きさは、現代の河川敷の河原で見られるものと変わりませんが、現在の河床面からは、1～1.5mほど高い、低い段丘と呼ばれる部分のついでです。



3 陵南小学校北

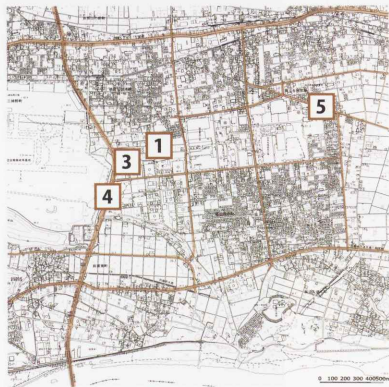
台地の南縁にも、木曾川が削った段丘崖が見られます。伊豆山から江南関線に向かう木曾川街道は、ちょうど各務原台地の南縁をたどるようにすすんでいきます。木曾川街道を車で走っているだけではなかなか実感できませんが、陵南小学校北あたりから眺めてみれば、高い崖すれすれを車が行き交う姿を見ることができます。





台地に住む 台地を行き交う

台地上を住まいとした縄文時代の人々、台地を横切って作られた古代の主要道路を行き交った人々の目に、各務原台地はどのように映っていたのでしょうか。当時の景観をうかがう景色を、台地の上で探してみましょう。



収録されているスポットには、民有地も含まれます。許可なく立ち入りはしないでください。

1 炉煙遺跡

県指定史跡

台地上に立地する炉煙遺跡は、縄文時代中期を中心とした集落です。昭和43年からの発掘調査の成果をもとに、現在は遺跡公園として堅穴住居などが復元されています。遺跡公園の南を流れる水路は、かつて台地上を侵食して流れていた小河川が整備されたものです。こうした小河川沿いに縄文人のムラが形成されていたと思われる。公園内にも、縄文ムラの暮らしを支えていた「せせらぎ」が再現されています。



2 炉煙出土品

県指定重要文化財

昭和43年から46年にかけての発掘調査で出土した資料のうち、421点が県文化財として指定されています。57点の土器のうち代表的な器種は「咲煙式」と呼ばれる深鉢形土器で、口縁が内側に大きく湾曲している特徴があります。指定された出土品の一部が、各務原市埋蔵文化財調査センターで展示されています。



3 ミツ池遺跡（炉煙遺跡C地区）

炉煙遺跡周辺では、防風林遺跡、炉煙南遺跡など多くの縄文時代の遺跡が確認されています。ミツ池遺跡もそのひとつで、縄文時代中期ころの住居跡や、各務ヶ原飛行場防衛のためと思われる高射砲跡が見つっています。また弥生時代始めころの土器を利用した棺も見つかり、稲作のために台地を降り低地で暮らした弥生人も、墓として台地上を利用していたことがわかりました。



4 江南関線

航空自衛隊岐阜基地の東端に沿って台地を降りていく江南関線は、台地を侵食して流れていた小河川の道筋そのままに利用されています。江南関線と基地敷地との間には、今も水路と散策路が整備され、かつてここが台地を削って川が流れていた名残を止めています。



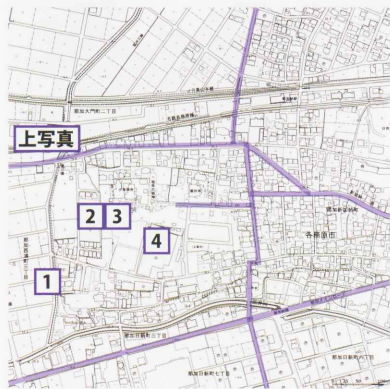
5 東山道

岐阜各務野高校の北を斜走するまっすぐな道路は、律令時代に整備された、古代の官道である「東山道」ルートと推定されています。現在、この道は、鉄道や国道で分断されているものの、延長は、各務部の郡衙と推定されている、蘇原野白町周辺の蘇原地区につながります。また東は嫁振坂を経て、木曾川渡河地点である鶴沼古市場町、南町あたりへつながります。





中山道随一という鶴沼と加納の長い宿場間を埋めるように営まれた「間の宿」新加納。町並みに続く坂が各務原台地の西のはじまりとなります。この地に古くから拠点を構えた旗本坪内氏の存在は、現代に続く台地の飛行場としての活用にもつながっていました。



収録されているスポットには、民有地も含まれます。許可なく立ち入りはしないでください。

1 台地西縁

各務原台地の西端にあたる新加納周辺は、近年大型商業施設の出店など、その姿を大きく変えつつあります。天正 14 年(1586)の大洪水による河道の変化の前には、木曾川は台地下を流れ、現在の境川の流路を通って墨俣で長良川に合流していました。



2 少林寺

台地西端部の半島状に西へ突出した部分には、臨済宗の高僧であった、東陽英朝ゆかりの寺院である少林寺が位置しています。お寺のすぐ西には緩やかながら段丘崖が迫っています。各務原台地と台地を乗せている基盤そのものが西に向かって傾斜しているため、段丘の比高差は、各務原台地東部ほどではありませんが、それでも天然の要害のようにそびえ立って見えます。



3 坪内家墓所

関ヶ原で戦功をあげ旗本となった坪内氏は、新加納に陣屋を構え領地の支配にあたりました。陣屋に隣接した少林寺は代々の坪内氏菩提寺として保護されてきました。のちに坪内は三人の兄弟による内分家に分かれましたが、ここ少林寺には新加納宗家を含めた坪内氏一族の墓標も集められています。

さかのぼって坪内氏は火器の扱いに長じ江戸初期には鉄砲頭を務め、前渡坪内氏の十二代目昌壽は明治維新において大砲方として新政府側についています。この昌壽が、広大な各務原台地を目をつけて、大砲の積古場として利用したことが、後に各務原飛行場の開設につながっていました。



4 新加納宿

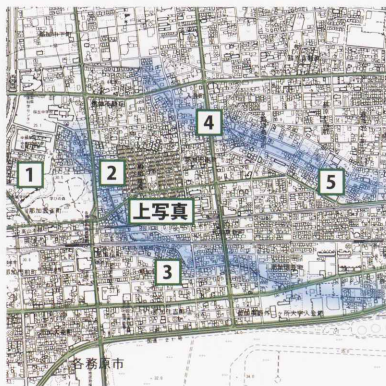
江戸時代には各務野の西の玄関口、中山道間の宿として昨日した新加納は、これ以前より旗本坪内氏の拠点として機能していました。西に細く突き出た台地の突端に、陣屋と菩提寺である少林寺やその他の寺社・施設が天然の要害のようにまとまっています。

平成 23 年に行われた発掘調査では、残されている絵図と符合するように、深さ 3m もある陣屋の堀も見つかっています。





平田に見えて、台地上には小河川がつくりだした谷がいくつも存在します。普段のアップダウンの繰り返しは、台地上で複数の谷を横切っていくために生み出されることは意外に気づかれていません。



岐阜基地内を源として台地の北西方向へ流れる百曲川は、深い谷をつくり、これを横切るコーエス通りはかなりのかさあげで、谷を渡っています。

収録されているスポットには、民有地も含まれます。許可なく立ち入りはしないでください。

1 学びの森

かつての岐阜大学農場跡地に整備された公園「学びの森」は、その北端部が各務原台地の段丘崖にあたっています。岐阜高等農林学校時代には、段丘崖の下の子り鉢状の空間が放牧場として使われており、公園として整備された今も、そのまま草地として保全されています。段丘崖の斜面に竹林が連なり、崖下に小さな水の流れや池がたたまずむ光景は、かつての各務原台地の姿をイメージさせてくれます。



2 けやき通り

名鉄「各務原市役所前」駅から北へ向け、学びの森の東端を通る「けやき通り」は、いったん学びの森の駐車場に沿って下り、急な登りに転じます。台地を侵食した小河川の谷が北西方向に走り、道路はこれを渡るためで、さらにいちよう通りとの交差点に行き当たるまでに、台地の縁辺から低地部へと続く下り勾配となります。この辺りは台地縁辺に近く、台地上を侵食した小河川の谷ももっとも深く、高低差を生み出しています。



3 信長町公園

学びの森の北東の斜面の正体は、岐阜基地内に源を発し、北西方向へ流れる百曲川のつくりだした侵食谷です。現在、学びの森周辺では百曲雨水幹線として整備されており、鉄道や道路の下をくぐりながら、信長町公園、桜公園などの脇を通っています。百曲がりの名のとおり、屈曲を繰り返す水路をたどって、かつての川筋と未だ谷の痕跡を残す地形を観察にかけまします。



4 かえで通り

国道 21 号線から北へのびる「けやき通り」もまた、台地上の侵食谷を横切るアップダウンが続く道路です。けやき通りも横切る百曲川の侵食谷は JR と鉄線を超える高架橋とともにかくぐりますが、その北には中下都市水路が整備された侵食谷が控えています。中下都市水路はやがて県健康科学センターの南端を通って、境川放水路へとつながっています。



5 蘇原第二小学校

かえで通りのアップダウンを生み出す中下水路の谷は、蘇原中央通りが JR 線を渡る踏切北を頂点とし巧みに屈曲しています。都市水路の整備によって、こうした谷底や河道の利用が可能となり、蘇原第二小学校のように、まとまった敷地を必要とする公共施設などに利用されるようになりました。



蘇原驛開設記念碑

蘇原町長 蘇原 誠二 氏 書 蘇原 誠二 氏 書



折々の繁栄 蘇原地区

台地上にはさまざまな時代の
人々の営みの記憶が残されてい
ます。

1 山田寺公園

各務原台地の北部、蘇原地区は、台地上からの流れがつくりだした谷が多く、公園付近ではあたかも北西に向かって岬のように突き出した地形が多く見られます。山田寺公園はその突端のひとつに位置しています。公園の北には県指定史跡となっている山田寺跡と礎石群が残され、織田信長の兵火で焼失するまで存在した中世山田寺が、低地を見下ろす台地の突端に堂塔を構えていました。

2 山田寺塔心礎

国指定重要文化財

山田寺公園に隣接する中世の山田寺とは別に、蘇原地区に集中する古代寺院のひとつ「山田寺」の塔の心礎が、公園の北200mほどに位置する無染寺境内に残されています。礎石に彫り込まれた舍利孔から発見された舍利容器とあわせて国指定重要文化財となっています。周辺の調査から、この礎石は移動されており、本来はこれよりやや西に寺域があり、ここもまた台地の突端に堂塔をそびえさせていたと推定されています。

3 旧河道に沿った道路

蘇原第一小学校の東の南北道路は、かつて台地上から北西に向かって流れた小河川の上につくられています。道路脇の水路は、かつてここが河道であったことの名残をとどめています。終戦直後に撮影された空中写真では、谷地形に沿って田が並んでおり、周囲より低いところであったことがわかります。写真の竹やぶは、中世から存在した館跡のまわりに残っている緑です。

4 野口館の堀と土塁

東西77m、南北76mをはかる中世からの館跡には、今も土塁とその外側をめぐる堀が残されています。江戸時代以降入所された所有者の方によって大切に管理され、今もその姿をとどめています。南側には、明治期に移築されたと伝えられる鉄門が構えられていましたが、現在は市に寄贈され、中山道郷泊宿へ再移築されています。移築時の解体で見つかった部材の墨書きから、元は大垣城で使われていたことがわかりました。

5 広畑野口遺跡

蘇原地区は古代寺院が集中し、東山道の推定通過地点ともなっている古代における各務原台地上の中心地です。市道拡幅にもなっている行われた広畑野口遺跡の発掘調査では、古代の瓦や「美濃国」の刻印を施した焼き物など、古代における各務郡の中心地、各務郡衙（郡役所）の存在をうかがわせる資料が多数出土しています。



引用・参考文献

- 小瀬洋喜ほか：各務原台地の地下水汚染 - その原因究明と将来予測 -, 各務原地下水汚染研究会事務局, 1990.
- 海津正倫：熱田台地・熱田層の形成に関する若干の問題, 名古屋大学文学部研究論集, 史学, v.42, 1996.
- 桑原徹：濃尾傾動盆地と濃尾平野, アーバンクボタ, No.11, 1975.
- 小井土由光：濃尾平野北部地域における地形と河川流路～美濃須衛古窯跡群を支えた約5万年前の粘土層～, 木曾川学研究, 第2号, 木曾川学研究協議会, 2005.
- 高木信行：各務原層の堆積に関する考察, 地理学報告 (愛知教育大学地理学会), 第45号, 1976.
- 中村俊夫・藤井登美夫・鹿野勘次ほか：岐阜県八百津町の木曾川泥流堆積物から採取された埋没樹木の加速器14C年代, 第四紀研究 32, pp.29-36, 1992.
- 西村勝広・可児幸彦ほか：岐阜県各務原市鶴沼における木曾川泥流堆積物層と古墳築造について / 第21回調査・設計・施工技術報告会, pp.1-6, 2012.
- 西村勝広・可児幸彦ほか：各務原市鶴沼に築造された坊の塚古墳の設計について / 第24回中部地盤工学シンポジウム, pp.119-126, 2012.
- 西村勝広・可児幸彦ほか：各務原台地下部層の堆積物からみた地盤形成の特徴, 第26回中部地盤工学シンポジウム, 2014.
- 西村勝広・可児幸彦ほか：遺跡分布から見た各務原台地の土地利用と安全確保の歴史 / 立命館大学理工学研究所紀要, 第72号, 2014.
- 横山卓雄・牧野内猛：岐阜県各務原台地の地質と地下水盆, 地質学雑誌, 第97巻, 第11号, 1991.
- Flood Maps: <http://flood.firetree.net/>
- Nishimura, K, Kani, Y, and Hayakawa, K: Historic land use and ground condition at Kakamigahara Plateau / The 15th Asian Regional Conference on Soil Mechanics and Geotechnical Engineering, 2015.
- Nishimura, K, Kani, Y, and Hayakawa, K: The formation of Kakamigahara Plateau judging from an old river duct / International mini symposium Chubu, 2016.

各務原市資料調査報告書 第40号
各務原台地シンポジウム資料集

平成28年11月20日発行

編集 各務原市歴史民俗資料館
〒509-0132 岐阜県各務原市鶴沼西町1丁目116番地3
TEL 058-379-5055

発行 各務原市教育委員会
〒504-8555 岐阜県各務原市那加桜町1丁目69番地
TEL 058-383-1111(代)



各務原市資料調査報告書第41号
2016 各務原市教育委員会

この事業は平成28年度に岐阜県教育委員会より推進補助金を受けています
各務原市